



仕事も人生ももっと楽しく!美しく!  
Life is so  
Precious!

## 北海道のと真ん中。 森の中の小さな町で ドキュメンタリー映画の 世界に魅せられた女性

映画監督  
田代陽子さん

### Profile

42歳。20代で東京から帯広に移住。'96年に帯広市の東、新得町で開催されている映画祭を観に行ったことをきっかけに、映画の世界へ。スタッフとして映画祭に参加するとともに、北海道を拠点に活動するドキュメンタリー映画監督・藤本幸久監督のもと、助監督、編集など経験を積む。田代さんの初監督作品『空想の森』(<http://www.soramori.net/>)も上映される今年の「Shintoku空想の森映画祭」は9月19~22日に開催。

### ■世界各国キャリアへ、5つの質問

- Q1 仕事を成功させるための縁起かつぎは?  
縁起かつぎではないけれど、編集中の仕事場には「感謝」「広い世界を想う」「自分を信じる」の3つの言葉を掲げていた。
- Q2 バッグに必ず入っているもの3つは?  
万年筆、すべての情報を集約しているノート、首に巻いたり頭に巻いたり汗を拭いたり、野外撮影の必需品である手ぬぐい。
- Q3 あなたの街のストレス解消スポットは?  
岩盤浴のある施設に行く。
- Q4 理想の週末の過ごし方は?  
コーヒー豆の焙煎をし、淹れる。
- Q5 人に言われてうれしいほめ言葉は?  
やっぱり今は、「おもしろい映画でした」と言われることがいちばんうれしい。

北海道、十勝地方の山間にある小さな町、新得町を舞台に、7年がかりで撮ったドキュメンタリー映画『空想の森』。監督の田代さんが北の大地で気づき、私たちに伝えたかったことを聞いた。

——ご出身は東京なんですよ?

「はい。だけど学生時代に3年間カナダへ留学したせいで、都会では暮らせない体に(笑)。それで帯広に移住し、タウン誌の編集スタッフとして働いていました」

——映画との出会いは?

「28歳のとき、新得町の映画祭をたまたま見に行ったのがきっかけ。それまでの私は、映画を観ても年に1本程度で、ドキュメンタリー映画なんてまったく興味なし、だったんです。でも、畑の中に建つ廃校になった小学校の木造校舎を会場に、普段着姿の地元の人が集まって、映画を観てはあだこうだと語り合う姿が、すごく心に響いて…。そこから町の人たちとの交流が始まり、映画祭や、映画製作のお手伝いをするように」

——作品を撮ろうと思ったのは?

「新得の人々の暮らしぶりに魅了されてしまったんです。なにより衝撃的だったのが、野菜。果てしない手間と時間をかけてつくった野菜の力強いおいしさ、そして、その野菜を自分たちで食べる、という、真に豊かな暮らしを目のあたりにして、私も、そんなふうになりたいと、自分の思う映画を撮ってみたいと思ったんです」

——そして7年後、新得に暮らすふたつの家族の日常を描いた映画『空想の森』が完成したんですね。

「土の上で黙々と働き、家族で食卓を囲む。そんな、なんでもない日々を繰り返すうちに、季節が巡り、人は成長していく。その素晴らしいさを伝えたかった。今は上映会で全国を飛び回っています。ひとりでも観たいと言ってくれる人がいれば駆けつけたい。ビニールハウスや梅林で上映したこともあります。そして、この作品を通して、人と人がつながっていけば、それはなによりもうれしいこと」